

修験道は一般的に、神道、道教、仏教、そして山を神・霊・死者の住む場所として信仰する山岳信仰が習合したものであるとして、7世紀に発達した。神道と同様、修験道は自然を敬う強い心を起源としており、山岳信仰は6世紀に仏教が伝来するはるか以前から日本で実践されていたものと考えられている。

毎年7月1日、修験者（山伏）たちは谷川岳の北側の峰であるオキノ耳に登り、富士浅間神社の奥の院で参拝を行った。その場所から下の谷へ賽銭を投げ入れると、対岸の沢に届くように思えたので、その沢をゼニレ沢と名付けたと考えられている。谷川岳下のこの沢（一ノ倉沢）では、今も江戸時代（1603～1867）の硬貨を見つけることができる。

朝鮮半島から仏教が伝来した後、「耳ニツ」とも呼ばれる谷川岳の2つの峰は、薬師如来（やくしによらい）、そして仏教と神道の習合神である浅間大菩薩（せんげんだいぼさつ）の2体の神が宿る場所として知られるようになった。里宮が山麓近くに建立され、現在も富士浅間神社（ふじせんげんじんじゃ）として存在している。神社の中には、これらの仏像が浮き彫りにされて磨かれた鏡（懸仏）がある。

伝承によれば、まず1380年に頂上に奥の院が建立され、17世紀半ばにはそれよりも小さい里宮が山麓に建立された。また伝説によれば、富士山（ふじさん）から発せられた光が谷川岳を照らし、浅間大菩薩を頂上に連れてきた。それと時を同じくして、眠っていたある村人の前にその神が現れて村に恵みをもたらした。翌日、村人たちは山へ登ると1本の満開の桜の木を見つけ、その枝には一面の鏡がぶら下がっていた。そして、彼らは鏡を納めるためにそこに神社を建立した、と言われている。もうひとつ、木花咲耶姫（このはなさくやひめ）と呼ばれる見目麗しい女性が登場する伝説もある。頂上と山麓にある2つの神社はこの神を祀ったもので、目の病気を抱えた者が薬師岳（やくしだけ）（現在はトマノ耳と呼ばれる）にある洞穴から湧き出る水に目を浸すと、病が治ると信じられていた。また、地元の温泉街の源泉近くには薬師如来を祀ったお堂が建っている。